學會彙報

○昭和十年度漢文學科講義題目

公羊傳注疏（演習）　諸橋　教授
老莊講義　諸橋　教授
經學に於ける特殊問題（支那の家族制度について）　諸橋　教授
禮記注疏（演習）　內野　教授
日知錄（演習）　內野　教授
儀禮講義　島田　講師
支那道德史　服部　講師
支那哲學概論　宇野　教授
文選講義　瀧川　講師
元曲講義　鹽谷　講師

○本年度卒業生論文題目

中庸の研究　岡阪　猛雄
漢代教育制度攷　杉本　重雄
常州學論語說　福家　弘
日本に殘存せる支那古韻の研究　松村　利行

○本年度學會委員氏名

研究部　渡邊末吾・岡阪猛雄・倉田貞美・上原好一
編輯部　松村利行・鎌田正
會計部　小澤文四郎・坂柳童麟

○春季講演會

昭和十年五月十八日（土）午後一時半より、新館第二會議室に於て開催す。諸橋・內野・森本・熊坂・小林諸先生を始め、先輩及び學生會員等五十餘名の列席を得、近來稀に見る活氣ある盛會にして、本年度劈頭の講演會として意義する所甚だ大なるものがあつた。其の要項次の如し

一、開會之辭　學生　岡阪猛雄君
一、支那古代哲學の一つの見方　學習院教授　文學博士　飯島忠夫先生
（御講演は幸に別項の如く掲載するの榮を得ました。）
一、閉會之辭　會長　諸橋　教授

○第十二回研究發表會

六月十五日（土）午後一時より、漢文學第一研究室に於

て、左の如き研究發表會を開催す。諸橋・小林諸先生を始めとし、先輩學生其他約三十名の列席を得たり。

一、開會之辭　　學生　岡阪猛雄君

一、周末秦初に於ける師法並に今古文の狀態　　先輩　内野熊一郎氏

（御研究の内容は、斯文第十八編第二號に掲載せられて居りますから、就いて御參照せられんことを切望します。）

一、閉會之辭　　會長　諸橋教授

○秋季講演會（其の一）

十月十五日（火）午後三時半より、漢文學第一研究室に於て、次の如く秋季講演會を開催す。諸橋、内野諸先生を始め、先輩學生其他併せて約四十名列席。

一、開會之辭　　學生　倉田貞美君

一、十三經注疏正字に就いて　　武藏高校教授　文學博士　加藤虎之亮先生

御講演の大略を申上げると、最初に校勘の必要と支那各時代に於ける校勘の概略を論述せられ、次に阮元の十三經注疏校勘記の成立に最も關係あるものを、我が山井鼎の七經孟子攷文及び浦鏜の十三經注疏正字の二本とし七經孟子攷文の校勘に於ける勝れたる態度を稱讃し、愈、浦鏜の十三經注疏正字の御研究を、其の成立の事情及び其の内容等に關し、極めて興味深く發表せられた。

十三經正字八十一卷は、浦鏜の著とも云はれ、又四庫全書總目提要には國朝沈廷芳撰とあるのが一の疑問であり、次に阮元が引用中に乾隆版殿本所載のもの多きも、彼は之を「殿本曰」と稱せずして、すべて「浦鏜曰」とせしことが疑問の二である。後者の疑問に就いては、嘉善縣志浦鏜の傳には、浦鏜が十三經正字八十一卷を作り壬午卽ち乾隆二十七年に死すとあるも、殿本は乾隆十二年に成るを以て、年代上浦鏜の說が殿本の材料になつたのでなく、寧ろ浦鏜が殿本を材料として參照したものと思はれる。然らば何故に阮元が殿本をあげずして「浦鏜曰」としたか。其れは殿本は近代の文體を以て、思ひ切つた改刪を行つたもので、之に從ふ事が出來ない。然し殿本は勅撰たる以上、之を正面より攻擊し得ない。依つて殿本を參照せる浦鏜を非難することに依つて、陰に殿本を攻擊非難したものであらう。

前者の疑問に就いては、傳に依れば、沈廷芳は乾隆三十七年に死し、且十三經正字八十卷を著はすとある。而して沈廷芳氏六十一歲の時浦鏜が死んでゐる。又汪中の

作にかゝる沈氏の傳には、正字八十卷は浦鏜・沈廷芳二氏合著とある。之に依つて考ふるに、浦鏜が家居著書に專らなりしも、經濟的餘裕なく正字を出版するに到らなかつた。之を沈氏が聞き、幾分之に改補を加へたものを、沈氏の死後其子が父の著として世に出したものであり、斯くて乾隆四十七年四庫全書中に國朝沈廷芳撰として收められたものである。阮元はこの事情を知つてゐたので、校勘記に於て沈氏には一言も言及しなかつたのであらう。

次に正字の內容に就いて、浦鏜の新說卓見の多きを述べられたが、今省略する。

一、閉會之辭　　會長　諸橋教授

○秋季講演會（其の二）

十一月三十日（土）午後二時より、新館三五五心理學教室に於て、次の如く講演會を開催す。諸橋・內野・熊坂小林諸先生を始めとし、先輩學生等併せて五十餘名列席極めて有益にして興味津々たる講演會であつた。其の要項左の如し。

一、開會之辭　　先輩　渡邊末吾氏

一、長安の古蹟を訪ねて——佛教史蹟を中心として

東方文化研究所研究員　結城令聞先生

本年八月より十月下旬にかけ、東方文化研究所より派遣せられて支那文化御研究の中、長安古蹟に對する學的憧憬より、偶然に又危險を冒して、遂に先人未踏の長安の古都を訪ねられたとの事で、先生の御講演は最も興味あるものであつた。御講演に從へば、今の長安は隋唐時代の皇城の跡にして南北五里、東西七里の都會であり、この地は歷代帝都たりし上、更に佛教文化の根源地であり、他の地に比して到る處容易に史蹟は眺められ、又自然の風物も一種云ひ得ざる親しみと懷しさとを以て觀ぜられたとのことである。我國の佛教たる律宗・法相・三論・華嚴・天臺・眞言等の諸宗は、何れも此の地に根源する所謂長安佛教の系統を有するものにして、當年の寺院や高僧の墳墓が多く、佛教史蹟上特に重要にして且興味あるとの事である。先生は之等佛教史蹟調査の狀態を幻燈寫眞を使用せられて、一々詳細に說明せられ、一同をして眞に長安古都に游ぶの思ひあらしめた。

最後に、彼の地を旅行して見ると、文廟や佛教寺院の破壞夥しきに比して、道觀は破壞の度少く、更に回教關係のものの如きは整然として舊態を存してゐる。其の原因は、儒教や佛教は支那一部有識階級のものにして、一般

一、「至」の古韻と萬葉集・風土記の誤訓に就いて　學生　松村利行君

一、閉會之辭　會長　諸橋教授

○昭和十年度會計報告

收入	前年度よりの繰越金	四五、円七七
	會費	一〇七、〇〇
	寄附金	二八、〇〇
	學友會よりの補助金	四〇、〇〇
	特別收入	七〇
	合計	二二一、四七
支出	通信費	一二、円二二
	紙代	七八
	學會茶菓代	七、〇〇
	講師謝禮	五二、一六
	交通費	三、九八
	小使手當	二、〇〇
	會報第四號出版準備費	二、一〇
	合計	八〇、二四
差引殘高、		一四一、二三

（二月廿五日調）

民衆に取つて深く意識化せられざるが故に、軍閥に依て文廟や寺院が破壞せられても、何等意としないのであり、又他面彼等の之に對する文化價値意識が日本人に比して遙に及ばざるに存する。故に我々日本人は機會ある毎に、又特に機會を作つて、彼等に其の文化價値を知らしめ、彼等をして自覺せしむる事の重要性を强調せられた。

一、北京學界の現狀に就いて　清華大學教授　錢稻村先生

先生は極めて謙遜なる而も熱誠なる態度で、北京學界の現狀に就いて、官公私立の諸大學、學術研究院、圖書館、博物館及び學術の狀態等の諸項に亙つて詳細に御講演せられ、極めて有意義であつた。

一、閉會之辭　會長　諸橋教授

○第十三回研究發表會

二月十九日（水）午後六時半より、本館第二會議室に於て本年度最後の研究發表會を開催す。發表者は何れも本年度卒業生であつて、各卒業論文の粹を發表せられたものであり、益せられる所甚だ大であつた。

一、開會之辭　學生　倉田貞美君

一、朱子の性說に就いて　學生　岡阪猛雄君

一、漢代の博士に就いて　學生　杉本重雄君

一、康有爲の論語注に就いて　學生　福家弘君